

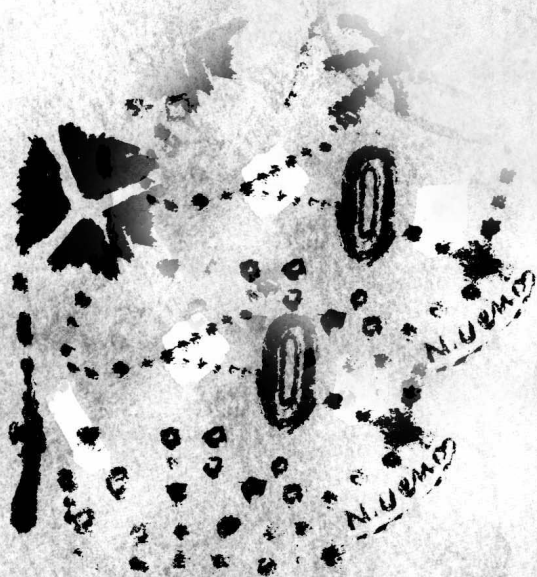
北の旗雲



高橋 揆一郎

北の旗雲

高橋 揆一郎



新潮社



北^{きた}の旗^{はた}雲^{ぐも}

著者 高橋揆一郎（たかはしきいちろう）

昭和五十四年十一月十五日印刷

昭和五十四年十一月二十日発行

発行者 佐藤亮一

印刷所 株式会社金羊社 製本所 神田加藤製本

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一二 編集〇三(266)五四一

定価 九八〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第一部 夏の日の紅い花……………5

第二部 聖者の毒……………123

装画・上野憲男

北 の 旗 雲

第一部 夏の日の紅い花

一

遠くで蒸気の洩れるような音がしている。夢うつつの中で正彦はそれを聞いていた。

雨の音と分るまでしばらく間が必要だった。

はつきりと目をさますと、ガラス戸一枚向こうの外の闇がしゅうしゅうと鳴っていた。

ついまいしがた降り出したのだろう、ゆっくりした間合で軒端の雫の音がまじり合っていたが、それが少しづつあわただしくなつてゆく。

脂くさい夜具の襟を引き上げ、膝小僧を抱いて暗闇の中で目を凝らしていた。真夜中か明け方か時刻の見当がつかない。下宿は寝静まって何の物音もたてない。

すぐ枕元で鳴っている目ざまし時計を見るためには明りをつけなければならぬが、ぬくぬくした夜具から這い出すのが億劫である。一定の響きを伝えていた雨脚が、ときどき強くなったり弱くなったりするのは風が出てきたためであらう。

朝が近いのかも知れない。

そう思うとやはり時刻を知りたくなつた。

床を抜け出し、四つ這いになって勉強机の上の電気スタンドに明りを入れた。小さくぼんやりした光がスタンドの足もとを円く照らし出した。時計は午前四時を少し回っていた。

机の上に一冊の本がある。円い光の中に、場ちがいな風情でぼつんと置かれている。

褐色の箱に「産業立國主義と現代社會」という表題が読める。かなりの古本だが、正彦が眠っている隙に何者かの手でこっそり置かれていったというふうにも見える。

あのとき首尾よくいっていさえすれば、こんな無味乾燥な代物に代わって、もっと大冊の「獨逸文學史」がこの机の上にどっかりと載っているはずだった。「文學」と名がつくならどれでもよかったのだが、その本屋に入ってあれこれ見て回るうちに目を吸い寄せられたのが「獨逸文學史」である。灰色の装幀の硬質な雰囲気を感じたその本がにわかには欲しくなった。

定價九圓五拾錢。逆立ちしてもそんな金が出てくるはずがない。やるしかない、と思った。緊張が一気に昂まり急に喉が乾いてくるようだった。それから逃れるためには黙って本を書架に戻して足早に立ち去れば済む。しかし足が動かなかった。「ゲルマン民族の大移動」だとか「疾風怒濤」などの文字を穴のあくほど見つめて立ち竦んでいた。

どこの書店でも学生は店内ではマントを脱ぐように貼紙がしてある。正彦は左肩に掛けたマントをゆすりあげるふりをして「獨逸文學史」をその中にまぐるこもるとした。角帽の大学生がずっと寄ってきて書架の高いところを見あげながら横歩きになって正彦の背後をすり抜けた。錯覚だったろうか、その大学生に肩先をとんと突かれたような気がした。

「獨逸文學史」をさりげなく目の高さの書架に戻し、返す手でその横の褐色の本を引き抜いた。それから今の大学生のあとを追うように横歩きで書架を見上げながら出口に向い、マントを羽織って店を出た。半町ほどゆっくりと歩き、角を曲がってから走った。

下宿に帰りついてしげしげと眺めてみた。「産業立國主義と現代社會」……何のことやらさっぱりである。夕食をとって夜学へいき、ずっと気にしながら帰ってみると本は机の上にひっそりと置かれたままだ。攫われてきた人質のようだった。

しかしその人質が次第に昂然として見えてくる。

机の上に大の字になって、さあどうしてくれるといっているふうなのだ。罪びとに罪の深さを思い知らせるようにびくりとも動かない。一大決心をして満座の中の花嫁を攫ったつもりなのに、見も知らぬ硬骨の老人を連れてきたようだった。

返してこようかと正彦は思った。この本はいったんあの書店のあの位置に戻され、あらためてそれにふさわしい人の手に渡るのでなければ、出版されて世に出た甲斐がないのである。正彦の手の中にあつては価値を失うのである。

はじめて悪いことをした、という気がしてきた。戦時下にあつて書物は早くも物々交換なものだった。十六歳の、下宿住いの正彦には交換するような本は何もない。

しかたがなかったのだ、と正彦は呟いてみる。
とにかく文学と名のつくものなら何でもよく、そういう本だけを集めて大きな書棚を構えてみたいのだ。

夜学校の、ある上級生の下宿へ遊びにいった胆をつぶすほど驚いたことがある。六畳の部屋の壁が書物で埋めつくされていた。田舎の金持ちの息子だというのに、まともな学校に入らず、昼はぶらぶらしているようなその上級生は、人を呼んでは自分の蔵書を見せびらかすのが楽しみなのである。むろんのこと、どの本も手垢ひとつついていず、棚の容量の分だけ整然と本が納まっている。書齋らしい独得の乱雑さは微塵もなく、何だか書店の一隅といった塩梅だから、正彦としてもこのたくさんの全集や辞書の類が死蔵されているだけだという蔑みを押えることができなかった。

それでも羨ましかった。こういうたくさん本の本に囲まれて文学を語り、芸術を論じるのならどんなにしあわせだろう。つくづくもったいない思いがしたけれども、まぎれもなくこのぐうたら

息子の蔵書なのだから指一本触れることができない。人に見せびらかすのが目的だからむろん絶対に人に貸すということをしてはいけないのだという。

正彦の四疊半には一間幅の押入れがあつて、その横半間が形ばかりの床の間になっている。目のところそこは水彩画の道具や古いヴァイオリンや、剣道の竹刀やあとはごたごたした小物の箱類で占められているけれど、そこにぎっしりとつまつた本棚が出現する空想を何度描いたことだろう。正彦の持つ本といえば、勉強机の横の、高さ八十センチほどの貧弱な本箱の中に参考書と僅かな文芸雑誌が並んでいるだけである。学校で「汗牛充棟」という言葉を覚えたばかりにますます夢がふくらんでくるのだった。しかし昨夜は夜学から帰ったあと、下宿人たちとも顔を合さず、この四疊半に引きこもつたきり、自分のものとは到底思えないわずか一冊の褐色の本と向かい合つたままなすことなく終つたのである。

再び床の中にもぐり込み、首だけ出して枕元に置いたその本を上げ上げと眺めていた。定価金壹圓參拾錢という活字がいやに目につく。

ふいに襖一枚の隣室で同じ下宿人の藤川さんの悲鳴のような寝言が聞こえた。この地方の裁判所で筆耕をしている藤川さんは大学受験を二度失敗して、まだ望みを捨てずに猛烈に勉強をしているのである。恐ろしい幾何や数学の化けものに攻められる夢でも見て、悲鳴をあげているのだろうか。

しゅうしゅうという雨がいつまでもやみそうもない。

夜学が短縮授業で二時間で放課になった夜、C組にいる悲人哀花が正彦の下宿へやってきた。路地に面した正彦の部屋のガラス戸をはとと叩いて、ぼくだ、ぼくだといっている。早い放課は正彦としてはよい機会でもあるので担任の図画教師と話をしたかったのだが、担任は早々に

帰宅してしまつて果たせなかった。泰西の名画に特有の茶褐色の多用について、美術史的な意味があればそれをたずねてみたかった。光と影の、どの部分をとつてみても茶褐色が美しく、かねがね惹かれていたからである。

担任を探している間だけ下校が遅れて、正彦は夜道をひとりで帰ってきた。下宿の部屋に戻つてズツクのさげ鞆を破れ畳の上に放り出したら、ガラス戸を叩く音がしたのである。

正面から入るように声をかけると、足音が離れていき、玄関戸が忍びやかに開いて悲人哀花の聲がごめんなさい、おぼんですといっている。入口をしめて、向こうの茶の間にまたおぼんですと声をかけて正彦の四畳半のドアを引いた。

白線帽子にマントという学校帰りのいでたちのまま、つめたい夜気をまといつてうっそりと立っている。

どうした、あおい顔をして、と正彦がいうと、どうもしないけど、顔、そんなにあおいかい、といつて丁寧に両手でドアをしめた。

マントを着たまま黒い三角形になつて畳の上に坐り、するめを二枚新聞紙からとり出して、おなががすくといけないから間食用にいつも鞆に入れてるんだ、食べようよ、といった。では遠慮なしに、といつてふたりで引き裂きながら少しの間黙つてするめを噛んでいた。

悲人哀花はペンネームで、本名は南出不二夫である。詩人になるのが夢なのでそういうペンネームを選んだという。ちょっと露骨な感じがするので正彦が指摘すると、これはあるとき直観的に口から出たものだから変えることができないのだといった。

正彦より一つ上の十七歳だが、もう剃刀を使っているから口許から顎にかけてうっすらと青みを帯びている。唇が丸く赤い。色白だからそれが美しく見える。瞳も濃く、いつも少し伏目がちである。

でも哀花、ほんとに顔色わるいけど、と正彦が覗き込むと、哀花の面上にみるみる血がのぼって目のまわりが色づくようである。

何かあったんだね、と正彦がいった。すると濃い睫を伏せて、ぼくは墮落したのだから知れないよ、詩人としての魂がよごれたのかも知れないよ、きつとそうなんだ、と下を向いてするめを舐めているから、そんなに気をもたせないで白状したらどうだと、正彦も噛んでいたするめの足を振り回した。

白状してもいいけど軽蔑しないでくれるかい、と哀花が小さな声でいう。聞かないうちは分らないさ、だけど軽蔑なんかしないと思う。

ならいけど、と哀花がひそひそ声になった。C組の男で近ごろ急に不良ぶくなったようなのがひとりいて、四、五日前それに学校帰りに誘われて、心ならずも銭湯覗きをしてしまったという。

女湯の脱衣室の、右下隅のガラス戸がごく小さく割れている。きつとだれかが苦心をしてあげたにちがいないが、それがちょうど目の高さにある上に、銭湯と隣の印刷会社の建物が、人ひとりがやっと入れるほどに壁を接して建っている。覗いているうちに人がきたら、その壁の隙間にさっとかくれると、まっくらだから通りからは全然分らない。そうやってずるずるとここ四、五日の間毎夜覗くようになった。

正彦がいった。みんな知ってるの、その覗き穴のこと。さあ、それはどうだか分らない。

そんなによく見えるの。見える、と哀花はちょっときつい眼差になり、大きな声ではいえないけど、ぼくは女のひとがもんべを脱いだりするところはじめて見たのさ、気が狂いそうになるんだ、だって真正面から見えるんだからね。

ズロースなんかぬぐところもか。もちろんさ、きのうの夜なんか一糸もまとわずに目の前だけ、

と哀花は早口になった。

ところが窓のはしでぼくの目が光って動いたんだと思う、女のひとが気がついちゃってるところと向こうを向いてしまったのさ。逃げたんだろおまえ。逃げなかった、ほんとに腰が抜けたようになっちゃったんだ。

聞いているうちに正彦も胸苦しくなってくる。哀花は実にうまいことをやったものだ。

でも今夜は様子が変わってしまった、と哀花は続ける。良心の呵責に比例しながら誘惑の方もいよいよ強くなり、今夜はとうとうひとりでふらふらと近づいていったところ、窓ガラスには内側から目かくしの黒い紙のようなものが貼られて何も見えなかった。すると突然、おいという声がすぐ鼻先の暗がりから起こったのだという。隣の印刷所との壁の隙間からその声は聞こえた。

先にだれかがかくれていたのだと思われるが、哀花は目がくらんだようになり、自分でもどこをどう走ったか分らないほど逃げに逃げて、気がついたら方角ちがいの電車道に出ていた。

城浦君の下宿がすぐ近くだから家に帰る気がしなくなって来てしまった、わるかったけど、と哀花はきまりわるげにいう。

わかった、それであおい顔してたんだ。そうだと思う。やっぱりゆうべのことがばれたんだよね、目かくしされちゃって惜しいことしたな、と正彦がいうと、惜しいことしたって城浦君、本気でいってるのかい。哀花が意外そうに聞き返す。

正彦としては本音だったのだが、正彦の潔癖を信じ切っていたとでもいったげな哀花の真剣な表情を見ると、本気だとも冗談だともいいにくく、黙ってするめを噛んでいた。

城浦君、ぼくを責めないのかい、墮落しかかっているぼくをさ。

だれだってやることさ、と正彦は冷静を装っていった。わるいことだけど、目の前にはあつとさ、どうぞ見てくださいって恰好だろ、理性より本能が勝つと思うよ、だれだってそうさ。

情欲は獸欲に等しいっていうのにかい、不潔なものがプラトニックに打ち勝つのを許すというのかい、もっとまじめに考えてくれよ、そんなに簡単に許してくれなくてもいいんだ。

たしかにこいつは清らかだったと正彦は合点がゆく。

哀花ほどの澄んだ心と目の持ち主が、そういう目先の情欲に振り回されて、しかも今夜などは暗がりから脅されて一目散に逃げ帰ったという醜態をやらかしたのはやっぱり意外な気はする。しかし哀花を罵る気分にはなれなかった。

哀花の清らかさを心の隅ではこばかにしているところもあるのに、それと今度の行動を並べてみると、清らかさの方が却っていきいきして見えるようなのだ。

みだりがましい行為だがそれほどみだらだとは思えない。そして哀花の心がよごれたとも墮落したとも思われない。それは哀花がひとつも嘘をいっていないからである。哀花は女の裸体を本当に見たいからこそ銭湯をのぞいた。そんなことをいえば男ならだれだって見たいのだけれど、哀花がそれを見たがるところに意味がある。

哀花は銭湯をのぞくことに成功して得意満面どころか、その自分を悲しんでいる。哀花の詩がうまいのかへたなのか、正彦にはよく分らないけれど、その韻律詩に限っていうなら正彦が逆立ちしてもかなわないと思っている。そういう詩人の才能や魂が、欲情に打ち負けるほどもういものなのかどうなのかというところで哀花は苦しんでいるのだから許される。

自分が哀花のような機会を与えられたら哀花ほどに自分を責めて苦しむだろうか。良心の呵責はあるだろうけれど、友人に訴えてまで自分を責めるようなことはしないだろうと思った。今夜は哀花の純粹さを見直した。

おまえつかまらなくてよかったよな、もうやめろよ、というとき哀花は激しくうなずいて、やめる絶対やめる、それにもう目かくしされちゃったし、といった。